



リンパ性白血病(LL)、マレック病(MD)と細網内皮症(RE)は、その原因ウイルスが異なるにもかかわらず出現する病変には類似する点が多い。そこでLL、MD、REの典型例の肝でこれら3例の組織病変を比較検討した。

LL例：約200日齢雌鶏。野外例。1958年採材。肉眼的には、肝は著しく腫大し、表面は平滑、灰白色の部分が大部分を占め、その間に細かいレース様の赤色模様が見られた。組織学的には、小葉間結合織から実質内に広く結節状に腫瘍細胞の増殖が認められたが、血管の内腔内での腫瘍細胞の出現や血管内皮の腫大、増殖の変化は乏しかった。出現細胞は核は淡明で大きく、時に大きな核仁を有し、ややヘマトキシリン好性の細胞質を有する大型細胞がほとんどで、ほぼ均一な大きさを示した(写真1、×380、H・E染色。Vは小葉間静脈)。

MD例：10日齢でMDウイルスを接種したもので166日齢雌鶏。1972年採材。肉眼的に肝は褪色し、著しく腫大していた。組織学的には、主として間質結合織を中心として、大小不同でさまざまな形態を示す腫瘍細胞が増殖していた。腫瘍細胞は比較的大きな門脈枝の内腔や腔内、中心静脈、類洞内にも多数出現し、しばしば内皮の腫大、増殖を伴っていた。また肝細胞索内へも侵入、増殖する像が認められた(写真2。×380、H・E染色)。

RE例：REウイルスT株を初生時に接種して9日後の鶏雛例。1974年採材。肉眼的には針頭大～粟粒大の灰白色巣が少数散在していた。組織学的には、淡明な大きな核と豊富なやや好塩基性の細胞質を有し、核内には1～2個の明瞭な核仁を有する腫瘍細胞が、小葉間結合織、肝細胞索内、静脈性血管の壁内及び腔内、類洞内に出現した(写真3、×380、H・E染色)。また類洞内皮を始め血管内皮の腫大・増殖も著しい。一部で壊死巣の形成も認められた。同様の変化は初生時にT株を接種した21日齢のウズラでも観察された。更に鶏雛例での電子顕微鏡検査では、腫瘍細胞は、細胞質に多数のポリソームがあり、細胞内小器官の発達は悪かった。核は核質に乏しく、電子密度の高い核仁が核の中央近くに存在していた。しばしば腫瘍細胞と腫瘍細胞との間隙にも各時期のC型ウイルス粒子が認められた。

まとめ：LL、MD、REの3者の鑑別点を求めるべく典型例の肝でそれら病変を比較検討したところ、腫瘍細胞はLLでは主として血管外性に出現増殖し、MD、REでは血管内性、外性に出現した。また出現細胞もLLではリンパ芽球、MDでは各種のリンパ球と細網細胞より成り、REでは出現細胞はこの三者の中で最も大きく未分化な細網細胞から成るものと思われた。今後、多くの例数を重ねて、これらの相違点を更に明確にして行く必要があると考えられた。